別府大学
NOV.21.1984
図書館

佐伯史談

第八十五号

「郷土史研究」誌
通算第百七号

昭和四十七年十一月十三日

佐伯史談会

事務所 佐伯市大字稲葉 龍護寺 羽柴方

研究

近世における佐伯・南海部郡の教育文化

大分大学教育学部
鹿毛基生

佐伯藩毛利氏は初代高政以後十三代相継いで明治に至っているが、この中で、とくに教育文化に功あった藩主の業績をみてみよう。

元禄十二年に襲封した六代高慶は来子学を尊び、宝永元年三月、学習所を設けて藩の子弟を教育したが、その学則学規等は不詳である。宝暦十年、六才にして襲封した八代高標は殊に学問を好み、常に文武両道を説き、安永六年、佐伯城内字鶴谷に学舎を新築して四教堂とした。このとき、藩士矢野黙斎・山本七兵衛を儒官として子弟の教育にあたらせ、さらに波窓の咸宜園に寓居していた久留米藩士松下筑陰を招き、佐伯藩教学の振興を図った。また文庫の充実をはかり、和漢の書籍を多数集めた。

藩主高標は自ら学堂に臨み、経史の講釈を受け、また藩士子弟の学業を督励した。高標は享和元年四十七才で没しているが、この後、四教堂儒官の職を襲いだのは、古田節右衛門・関三左衛門・佐野渡・朋石大助・中島増太らであった。十一代高泰の天保十四年には、日向高鍋藩より儒者秋月摘門を招き、教学いよいよ振興した。

これよりさき、享保三年には、武芸稽古所が城内に設けられ、さらに文化年間には直心流稽古所が増設された。両所とも四教堂に近接し、文武綜合の藩校として、その機能を発揮した。

豊後諸藩と同じく、佐伯藩も二万石の小藩であったが、藩主をはじめ藩内に好学の士が多く出でて文教を興した。六代高慶の子、毛利扶揺も明和・安永のころ、護園学派の影響

本号の内容

研究 近世における佐伯・南海部郡の教育文化（鹿毛基生）……一
研究 鶴溪矢野文雄先生（山内）……五
随筆 ぶんごさいき（石田清一）……九
随想 二題 猫正月・松（赤尾顕仁）……一二
雲霧 佐伯と副木南洲翁（最後回）その頃の毛利家（山永保）……一三
随想 思い出の糸をくる 夏祭「つくりもん」（佐藤）……一四
研究 日常生活の諸顔 羽柴清庄歴史文書（安部）……一五
資料 菊池久所米古面史跡巡り（高木）……一九
〃 畑野南中校会案内記（羽柴）……二三
〃 内所松頭新の昔を偲ぶ会（佐藤）……二七
集会案内・賛助寄付芳受
会費受領・あとがき等……二八

を受け、その詩文に長じ、制度考・書籍考・壺邱詩稿（十六巻）を著わした。なお藪園学派とは、古文辞をもって詩文に力を注いだ荻生徂徠の藪園塾の学風であり、享保から天明にかけて一世を風靡した。この頃から、漢学における学派は徂徠学をはじめとして、亀井学・淡窓学・昇平学などが佐伯藩教学に導入された。

八代高標も博学達識であり、因幡国若桜藩主の松平定常および近江国仁平寺藩主の市橋長昭と共に天下諸侯の三大学者と称された。また文政年間には、咸宜園および昇平校に修学した中島子玉が帰藩して、折衷派の学風を伝えた。

次に藩校四教堂学則の大要をみてみよう。

生徒等級　生徒ノ等ヲ九級ニ分ケ、一級ヲ初位トシ順次ニ昇級セシム、一級ヨリ四級マデハ上下ヲ分ケ、スベテ十三級トス

教科目書　孝経　大学　中庸　論語　孟子　詩経　書経　易経　春秋　礼記　小学　四書朱註

蒙求　十八史略　世説　左伝　国語　史記

授業方法　授読　輪読　復読　講義　勧講　講読　詩会　文会

教科目　和学　漢学　医学　習礼　兵学　弓術　弓術　剣術　槍術　柔術　居合　馬術　砲術

学習期限　上士ノ子弟ハ八才ヨリ十七才マデ文学弓馬剣槍ヲ兼ネ学修セシム、十八才ニ至レバ官務ニ服スルヲ例トス、中士以下ノ子弟ハ八才ヨリ十九才マデ文武ヲ兼修セシメ、二十才ヨリ仕途ニ就ク

職制　総学一名　学監一名　教授一名　助教約五名　監儀二名　句読師四名　書記二名　小使一名

生徒概数　在籍者約三百名　寄宿制ナシ、タダシ他藩ヨリ来学ノ者約二十名

家　脩　入学ノ節肩子一箱ヲ学校ニ差出スヲ例規トス

学校経費　一切藩費トス、諸雑費ハソノ都度官ニ請ヒ現品ヲ領収ス

藩主臨校　毎月二十七日勧講、毎月三・八ノ日試業、以上藩主臨校ノ定日トス

蔵書　経書　四十三部（六百四十九本）　歴史　二十五部（千三十九本）　子類　二十部（百十六本）　集部　三十八部（五百三十六本）　雑部　五十一部（二千三百七十七本）　通計　百七十七部（四千七百十七本）

佐伯・南海部地方に文教を興した先賢者およびその教育的業績を次にみてみよう。

中島子玉とその業績

子玉は増太と称し、米華とも号した。佐伯藩士、中島幹右衛門の長子である。文化十三年、十五才にして淡窓の門に入り、咸宜園に居ること数年、学問教養の基礎を培った。ついで文政五年に江戸に出て、昇平校に修学し、幕府儒官であった古賀侗庵に師事した。まもなく林大学頭述斎や因幡若桜藩主の松平定常らにその才を知られ、昌平校斎長に任ぜられた。

文政十年、ようやく帰藩して、佐伯藩儒となり、四教堂の教授として諸生を教導した。同十二年には再び遊学を志し、筑肥、京摂に行き、亀井昭陽・古賀穀堂・猪飼敬所・頼山陽・篠崎小竹らの碩学を訪ねて学識を博めた。

しかし、天保五年、事故により、三十四才の若さをもつて没したのは惜しむべきであつた。

子玉は生来、温厚厳正であり、淡窓もその才を賞し、山陽も才子無双と称した。昌平校時代は宜園の逸材として知られ、諸藩に咸宜園の名を高からしめた。著作に、愛琴堂集七巻、日本新樂府一巻、米華遺稿一巻などがある。その墓は久成寺にあり、碑銘は淡窓撰である。

設立年代は不明であるが、佐伯向島に中島蓋多による私塾が設けられ、天保三年には約七十名の門弟に漢学が授けられた記録があるが、子玉または中島一族の事跡かとも思われる。このころの佐伯における私塾は、すべて藩士の経営になるものであり、子玉も中小姓格に列せられ、天保十三年から嘉永四年までの御家中席帳には御徒士格に中嶋盛太や中嶋甚兵衛の名が見える。

秋月橋門と私塾誠求堂

橋門は日向高鍋の浪士秋月道遥の二子であり、十六才にして咸宜園に入り、ついで佐伯の中島子玉の家に寓居し、かち再び咸宜園に入つた。その後、筑前に遊び、亀井昭陽に従つて徂徠学を学んだ。二十三才のとき肥前島原において私塾を開いた。この後、備前におもむいて医術を修め、ついで京阪から江戸に遊学し、ようやく帰郷して医業を創めた。私塾誠求堂は弘化二年、佐伯に設けたもので、一期約百三十名の門弟に漢学を講じ、明治三年に廃止するまで、二十五年間、教育を続けた。

橋門は天保十四年には、十一代藩主高泰に招かれて藩文学に列せられ、四教堂の教授となつた。十二代高謙のときには侍講となつている。学風は、朱子・徂徠の説を論ぜず、亀井説を宗として、経説の長き採つたといわれる。漢学のほか、詩文や書を能くし、和歌にも長じていた。維新後は、鎮守府に属し、また葛飾県の知事になつた。没年は明治十三年である。

高妻芳洲とその私塾

芳洲の家は代々佐伯藩に仕えた。芳洲は、はじめ中島子玉に師事して経史を学び、さらに子玉の推挙をえて諸国に遊学し、学識を深めた。天保五年に、藩校四教堂の教授となり、学規学則を確立して、大いに学事を振興させた。塾名および設立年代は不明であるが、佐伯向島に私塾を設け、一期三十余名の門弟に漢学を授けている。芳洲は文久三年、五十一才で没した。

明石秋堂とその私塾

秋堂は、字は亀峰、青士と号し、本名を大助といつた。杵築藩士中根太仲の弟であり、はじめ杵築の三浦黄鶴に学んだ。九代藩主高誠のとき書物奉行となり、このころ明石家の養子となつた。その人格は寛容であり、かつ藩では博学をもつて知られた。設立年代は不明であるが、佐伯新道小路に私塾を開き、一期約二十名の門人に漢学を教えた。のち、郡代兼町奉行となつたが、公務以外のときには、日夜詩を作り、毅然として時流に組みせず、俗事を顧みなかつたという。

楠文爵と私塾好古堂

号を蕉窓といい、文政十一年、佐伯藩医、楠春篤の長子に生れた。幼くして学を好み、群童と異るところがあつたという。十六才のとき江戸に出て、儒者佐藤一斎に師事した。弘化二年には豊後に帰り、日出の米良東崎に就いて、さらに学識を得た。安政三年、佐伯に帰り、城南の冊所の一角に私塾好古堂を設け、門弟約百名を集めて漢学を教授した。その学風は一斎説（昌平学派中の陽明学派）を宗としたが、明治初年まで、その学徳を慕つて、数百の門弟が好古堂の門に入つたという。門下の逸材に矢野龍渓・藤田鳴鶴・箕浦青洲らがあつた。

維新後、新学制の発布により私塾好古堂は廃止されたが、文蔚は子弟の学に志す者の少ないことを嘆き、明治十三年、同憂の儒者関虔門と相計り、佐伯文教の振興を期して義塾植松学舎を新町に開いた。たちまち多数の門弟が集り、勉学に励んだという。文蔚はこの後、知人のすすめにより、東京に移住し、官職に就いて史料編集に従ったが、同二十五年七十歳をもって没した。

その他の先賢と私塾

佐伯には、その他の私塾として、塾名の判明しているものに次のものがある。

関　令蔵　暇修館　佐伯村　漢学　生徒百
嘉永元年～同七年

塾名は不明であるが、所在地・教科・生徒数の明らかなものは、次の九塾である。いずれも佐伯藩士の経営になるものである。

平山右文治　向島　漢学　生徒四十二
松岡清平　本町　漢学　生徒四十一
谷　永祚　本町　漢学　生徒三十六
伊東哲吉　住吉町　漢学　生徒二十二
高瀬樫平　本町　漢学・生徒十八
西名和平　山際小路　漢学　生徒十六
高瀬藤兵衛　山際小路　漢学　生徒二十七
高瀬熊八郎　田中小路　漢学　生徒二十三
松下左衛門　新道小路　漢学　生徒六十四

これは江戸末期の学校調による記録であり、生徒数は調査年度のものである。設立年代および廃止年代が不明であるため、これらの漢学塾が何年間継続されたか、今後の調査に俟たねばならない。

佐伯・南海部郡の先賢と寺小屋

佐伯には私塾がきわめてよく発達したのに比し、寺小屋の方は全郡中で最も少ない。私塾が漢学の区分に、読書算の基礎教科をも授けたのかも知れない。次の二寺小屋は佐伯に設けられたものだが、いずれも設立と廃止の年代は不明である。

杉原左伝太　本町　素読習字　男子二十四
衛藤組蔵　仲町　素読習字　男子十六

この他かの寺小屋は、木立村と大島に見られる。設立廃止の年代は不明である。

関　定山　松寿庵　木立村　素読習字　男子二十五
市野瀬春宗　大島　読書習字　男子十一　女子五

なお、杉原左伝太、衛藤組蔵は藩士であり、関定山は僧侶、市野瀬春宗は医師であった。

一般に寺小屋の授業は四季を通じて行われたが、寒村では農閑期に百日を一期（一春ともいい、一年間の字期）として開く場合もあった。教科は読書と習字の二科が最も多く、算術・諸礼・歴史の他かに謡曲・裁縫・農事などを授けたものもある。佐伯の吉田常吉氏によると、「好学特志の青年は、寺小屋を卒業して後も、夜間に油代を出し合って師宅に集り、種々の質問をして教えをうけた」とされている。このように寺小屋は単に手習いだけでなく、とくに寒村では一村教化の中心であったということができる。

（大分大学助教授・教育史）

（附記）

本文中、六代高慶（たか）、十一代高泰（やす）、十二代高謙（かた）の呼び方については、普通高慶（たかよし）、高泰（やすひろ）、高謙（たかあき）と呼ばれているようだが、ここでは福井大学教授笠井助治氏「近世藩校における学統学派の研究」佐伯藩の部によった。

なお小林信明「漢和辞典」によると　慶は人名として「ちか・のり・よし・ちか・やす・よし」と使われるとし　泰は「ひろ・やす・よし・ひろ・とおる」など、謙は「あき・かた・かね」などあり、高慶・高泰・高謙も正しいと思う。（庚毛）